

全学年道徳「“ふつう”を疑う力を育てる — 無意識の思い込みを可視化する体感型ジェンダー学習」



- ・「直感で選ぶ二択クイズ+理由入力」による、無意識の判断傾向と言語表現の可視化
- ・集計結果と事実の比較（理由の言葉の共有／帯グラフ操作ログ）による、思考のクセの自分ごと化と概念更新の促進

活用背景・ねらい

児童は日常生活の中で「男だから」「女だから」といったジェンダーによる決めつけを無意識に受け入れ、それを“ふつう”として捉える傾向があった。従来の道徳授業では、知識として理解しても自分の選択や行動と結び付けて振り返ることが難しかった。そこで本実践では、身近な選択場面を起点に、児童自身の判断や言葉を可視化し、「自分の中の当たり前」がどこから来ているのかを問い合わせ直す力を育てることをねらいとした。ジェンダーを特別なテーマではなく、自分の生き方や幸福と直結する問題として捉え直す土台づくりを目指している。

成果・効果

授業後、教室内では「それは人それぞれ」「どっちでもいい」という発言が自然に生まれ、決めつけを問い合わせ直す姿勢が定着。振り返りでは約9割の児童が「考え方を変えた」「これからの行動を変えたい」と記述しており、価値観の変容が確認できた。生活場面でも、係活動や遊びの選択において男女の枠にとらわれない話し合いが行われるようになった。ICT上に蓄積された選択結果や理由、振り返りコメントは、学びの変化を客観的に示す成果物となり、学級全体の対話の質と安心感の向上にもつながっている。

授業・取り組みの流れ

①直感で選ぶ導入場面

オクリンクプラスを用い「1週間住むならどちらの家を選ぶか」といった正解のない二択問題を提示。児童は直感で選択し、理由を入力。即時集計された結果と理由を共有することで「かわいいから女子向け」「かっこいいから男子っぽい」といった無意識の言葉が多く含まれていることに児童自身が気付く。意図は、ジェンダーを学ぶ前に、自分の思考のクセを自覚されること。



②視点を変えた問い合わせによる揺さぶり

同一の建築物について「男女どちらがデザインしたと思うか」を問う。予想と実際を比較することで、判断が性別イメージに依存していたことが明確に。教師は結果を否定せず事実と並べて提示し、児童が自分の判断を内省できるようにする。



③“らしさ”的可視化と社会との接続

「男らしい・女らしい」とそれがちなイメージをツールで分類し、ICT上で集約・再構成。さらに職業分布やジェンダーギャップに関する帯グラフを操作し、予想と実データを比較。思い込みが社会の不公平につながる可能性があることに視野を広げる設計に。ジェンダー・ギャップ指数という言葉にも触れ、日本は何位か予想しピン集計、指數1位のアイスランドの取り組みについて調べ、日本と比較した考察へ。



④振り返りによる意味付け

最後に「ふつうって何だろう?」という問い合わせに戻り、今日の気付きを言語化。教師は“変化”を特に評価し、学びを自分の生き方に結び付ける。これにより、態度変容につながる学習として定着させている。

